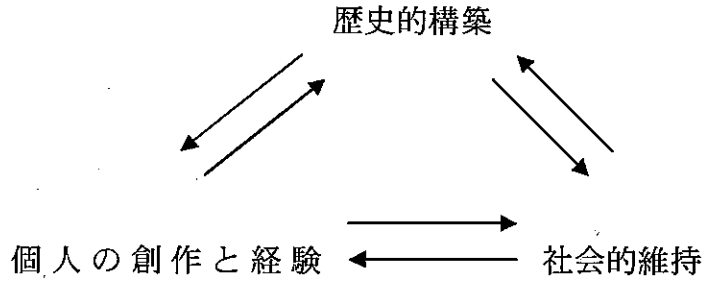
『日本伝統音楽における変化』　　徳丸吉彦

国立情報学研究所軽井沢土曜懇話会　　平成１７年７月９日（土）

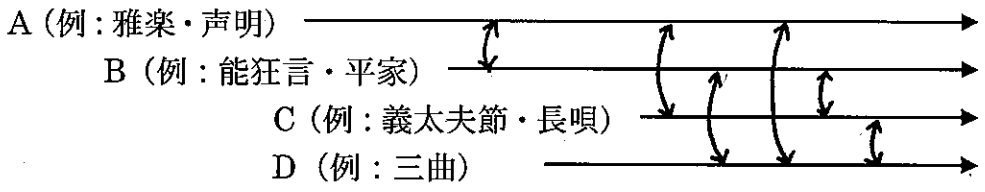
１．目的：伝統音楽における変化を認知する。発展としては捉えない。

２．対象は室内楽としての三曲：箏・三弦（三味線）・尺八による音楽。

３．Timothy RICE による音楽様式存在のための三つの要因



４．　変化しながら共存する音楽様式



５．　変化の要因

社会的維持：社会的脈絡がもつ拘束の強弱；制度の整備ほか

個人の創意工夫：身体的条件；新しい刺激への態度；音楽性の柔軟性；聴取能力；節度ほか

文化触変：異文化の影響

６．　演奏例

１）　八橋検校（1614－1685）　箏組歌《菜蕗組》より、「菜蕗というも草の名、茗荷というも草の名、富貴自在徳ありて、冥加あらせたまえや」。

２）　八橋検校《乱れ》より

３）　《乱れ》の本手と米川裕枝作曲三弦替手の合奏

４）　二世吉沢検校（1801・1808－1872）《千鳥の曲》より

５）　『糸竹初心集』（1664）の《小倉踊り》の三弦

６）　柳川検校（1680 没）・野川検校（1717 没）三味線組歌《京鹿子》より、「エイ尺八の、尺八の、一節切（ひとよぎり）こそ、音もよけれ、君と一夜は、寝もやらぬ、あら心なの、君様や、君様や。（合の手）、エ

イ其方（そち）と此方（こち）とは、松に藤の、下り枝の如く、誰彼時（たそがれどき）に、かかるか、情けに添ひし、身に身に纏（まと）はるる、纏はるる」。

7）　峰崎勾当《残月》より手事（18 世紀末）

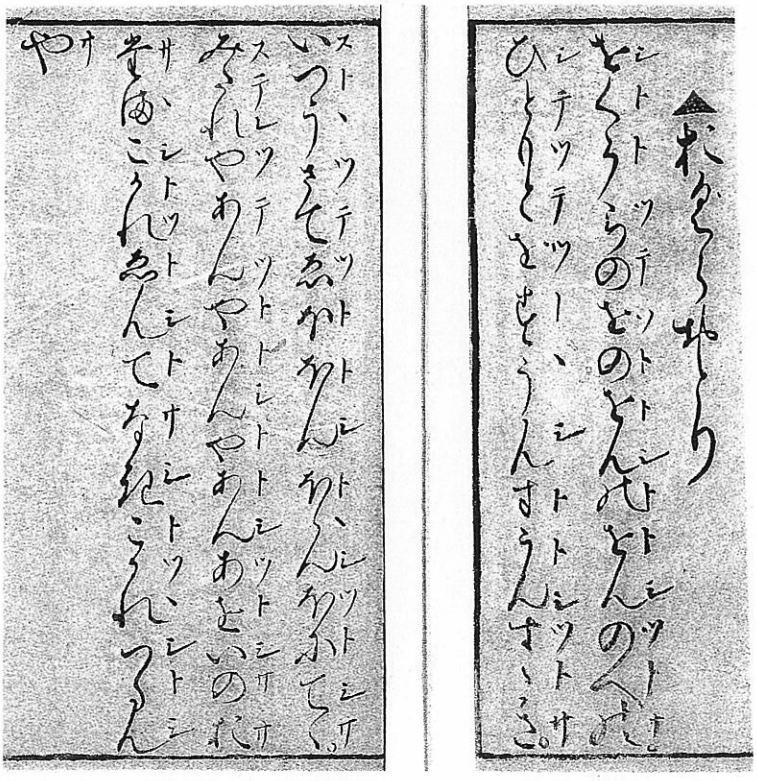
8）　普化尺八《調子》

9）　中尾都山（1878－1956）本曲《朝風》（1938）より

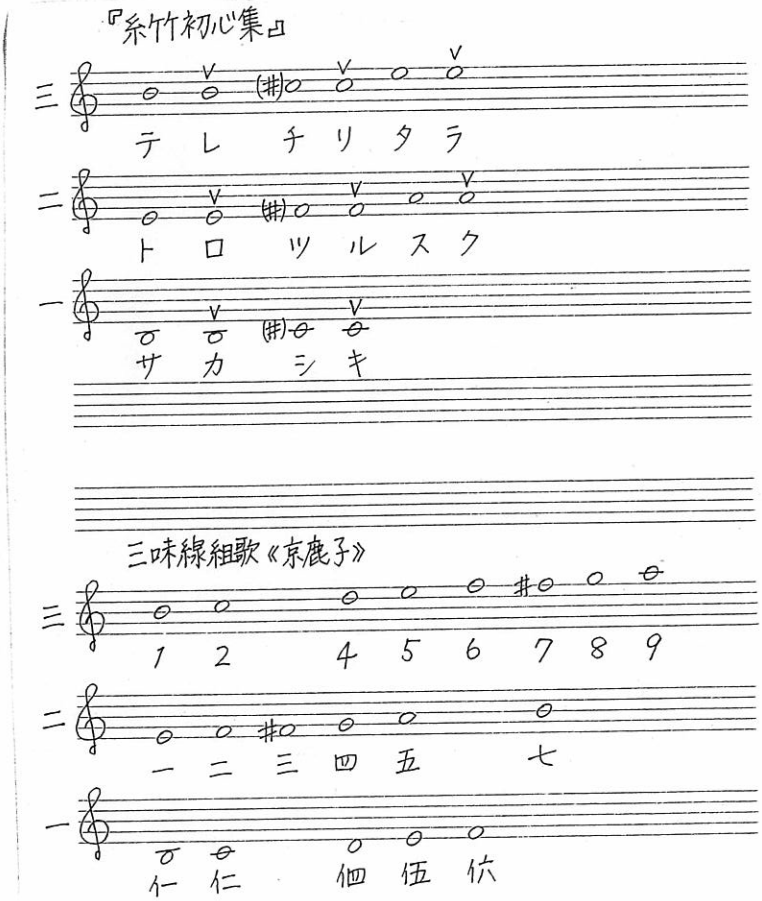
１０）諸井誠（1930 生れ）《竹籟五章》（1964）第 5 章「明暗」

１１）米川敏子（1913 生れ）《千鳥と遊ぶ智恵子》（1953）より「人間商売さらりとやめて、もう天然の向うへ行ってしまった智恵子のうしろ姿がぽつんと見える。二丁も離れた防風林の夕日の中で松の花粉をあびながら、私はいつまでも立ち尽くす」。

7．『糸竹初心集』《小倉踊り》



8．使用する三弦の勘所の例



演奏家紹介

米川裕枝（よねかわ・ひろえ）

地歌・生田流箏曲。幼少から母の米川敏子師（人間国宝・文化功労者）に古典的な方法で教育を受けました。古典と現代作品の演奏で知られ、海外のオーケストラや東京都交響楽団とも共演しています。芸術選奨文部大臣新人賞など多くの賞を受け、昨年はモービル音楽賞（邦楽部門）を受けました。最近の作品『月彩（つきあや)』はよく演奏されています。くらしき作陽大学特任教授。

長瀬淑子（ながせ・としこ）

山田流箏曲。若いときから音楽を始め、現在は山田流の亀山香能師に師事。東京大学医学部医療情報部医局長や、マクドナルドハウス財団事務局長など、医学と情報学をつなぐ仕事をしています。愛知万博の国連館内の展示の事務局長でもあります。こうした能力を邦楽普及にも生かして、足立三曲協会や日本音楽国際交流会を通して、中学生や教員への箏曲の指導を行っています。

川村泰山（かわむら・たいざん）

都山流尺八。化学工学とともに邦楽を学び、大学卒業後はＮＨＫ邦楽技能者育成会他で邦楽を学びました。山本邦山師（元・東京芸術大学教授、人間国宝）に師事。「尺八 1979」というグループを作って、尺八のための作品を発表するほか、古典と現代の両方で演奏活動を活発に行っています。1988 年に文化庁芸術祭賞を受けました。現在は東京芸術大学でも後進の指導に当たっています。

三好恒明（みよし・つねあき）

バリトン。東京芸術大学声楽科で声楽を学び、卒業後は、二期会に所属しながら、主として埼玉大学、岡山大学で教えました。声楽家としてだけでなく、日本を代表する音楽教育学の研究者としても知られ、ISME(ユネスコ国際音楽教会議)のアジア代表理事を務めるほか、芸術教育実践学会会長としても活動しています。現在は、岡山大学名誉教授、くらしき作陽大学音楽学部長。